フランクリンの
改良文字と音声学

小林智賀平

断り書——これは昭和23年5月，日本英文学会講演の原稿に筆を加へたものである。しかし「です調，おります調」を「だ調」に直した程度で，講演体の口調はそのまま残すことにした。それで聴衆への論文になつていることを附へ加へておく。

I

ベンジャミン・フランクリン(Benjamin Franklin 1706—90)の綴字改良といふと，一寸意外に思ふかも知れない。フランクリンといふ名は，明治時代からわが国でも親しまれてゐるが，それは主に自敍伝によつてである。彼はその伝記が示すやうに，印刷屋の小僧を振り出しに新聞を出したり，郵便局長となつたり，その他いろいろなことをして，ついに，アメリカ一流の政治家，外交官になつた。がその間，興味の趣くままなんにでも手を出す，といふ性質のやうであつた。例へば 1752 年，42 歳の時，稲妻と電気とが同じものであるといふ説を出して，国の内外に名前を知られるやうになつたこともあつた。

この頃，ジョンソンの辞引(Samuel Johnson, *A Dictionaly of the English Language* 1755)が出て，英語の規準化を図つたが，それでも一般に綴字の不統一といふことは免れることができなかつた。この点印刷屋の方面で若い頃から綴字の不統一に人一倍苦しんできたフランクリンは，イギリスやフランスにも渡つて，生粋の英語，フランス語に接し，母国語への反省を深めたことと考へられる。また十八世紀の後半に，アメリカでは独立の気運が

漸く高まつていくが，これに伴つて国語愛護といふことが叫ばれるやうになつてきた。このやうに時代に，フランクリンが鋭い観察の眼をもつて発音を調べ，綴字の改良とか簡易化といふ，全く彼の趣味にあつた問題に対して，一家言を出したのは，決して偶然ではない。これによつて私たちは，いろいろな意味で代表的なアメリカの偉人が持つてゐた良識と，すぐれた叡智とを見ることができる。

フランクリンは，1768 年（わが明和五年，この前年日本では富士谷成章の挿頭抄成る）の夏ごろ，といふと彼はすでに 63 歳の老齢であつたが，音声学に興味を覚えて発音を研究し，綴字の改良のため，今日いふ音声符号のやうな改良文字を工夫して覚書を書いてゐる。それは「新しいアルファベットと改良綴字法の企て」(A Scheme for a New Alphabet and a reformed mode of Spelling) といふ題である。これには「この問題についての注意書と実例およびその使用の試み」(with Remarks and Examples concerning the same; and an Enquiry into its Uses) といふ副題がついてゐる。そしてこの自分で考案した符号を使つて詩を書き直したり，（註記 1 及第一圖参照），またある婦人にあつて手紙を書いたこともあつた。(註記 2 参照)。しかしフランクリンはこの問題に対しすぐ興味を失つたと見えて，それ以上研究を進めてゐないから，この企ては必ずしも完成されたものとはいへない。また 63 歳の老齢では，自分の工夫した改良綴字を積極的に広めるといふ実践運動の気力にも欠けてゐたと思へる。またフランクリンの改良綴字は，いはゆる綴字の改良ではなくて，今日の音声符号のやうなところもあつたから，広く行はれなかつたが，ノア・ウェブスター (Noah Webster) には影響を与へたやうである。

そんな次第でフランクリンの改良案が出版されたのは，それから12年後の 1779 年（わが安永八年。この時本居宣長の「詞の玉緒」成る）で，政治・哲学などの論文といつしよになつて出てゐる。そしてこれは，1840 年に出

た 10 巻ものの全集 (Sparks 編) に入つてゐる。なほ 1806 年に出た 3 巻ものの著作集の第 2 巻にも入つてゐる。それは *The Works of Benjamin Franklin, L.L.D.* Vols 3. でその Vol.II は, *The Complete Works, in Philosophy, Politics, and Morals, of the late Dr. Benjamin Franklin,* とあつて, これに Now first collected and arranged, with Memoirs of His Early Life written by Himself (London, Printed for J. Johnson, St. Paul's Churchyard…) , いふ添書がしてある。これは, フランクリンの原稿からぢかに取つたものと断つてゐるから, 資料としては確実である。筆者は西脇順三郎教授の好意によつて, 慶応大学附属図書館にあるこの3巻物を使ひ, また写真も取らせてもらつたことをここに感謝する。

なほフランクリンには, この論文のほか「英語と印刷に現在行はれてゐる改新について」(On Modern Innovations in the English Language and in Printing) といふ一文もある。これは, ア・ウェブスターが「英語論考」*Dissertation on the English Language* 1789) といふ, 英語史のやうなことを書いた本を出してフランクリンに献じたので, そのお礼に書いた手紙である。そしてこの文章の中にも, 言葉の移り変りに対してフランクリンが深い注意を持つてゐることが窺はれるやうな例がいくつかあるが, これはいま本筋に関係がないから省略する。

いまは「新しいアルファベットを改良綴字法の企て」といふ10頁位の論文によつて, フランクリンの音声学のやうなものを検討することにしよう。なほ彼の綴字改良案に, 前にあげた, ある婦人へあてた手紙の中にあらはれてゐるが, その方はあまり面白くないからいまは説かない。また綴字改良運動の歴史上, フランクリンがどういふ位置を占めるかといふ点も省くことにする。この「改良綴字法の企て」といふ論文では, 音声の研究者としての, フランクリンの立場がよくわかるから, これを述べて当時のアメリカ英語の音韻体系の記述といふ点を中心として論じ, また音韻史の資料としての面にも

触れたいと思ふ。

II

この「改良綴字法の企て」といふ論文は，

(1) 改良文字表 (Table of Reformed Alphabet) (第二図参照)

(2) 注意書 (Remarks)

(3) 実例 (Examples)

この三部からなりたつ。

まづ第一の改良文字表は，(a) 母音の部分と，(b) 子音の部分とに分れる。

(a) 母音について

まづ母音の表を示すと (第二図参照)

1. *o*
2. *ɑ*
3. *a*
4. *e*
5. *i*
6. *u*
7. *y*
8. *h*

このやうに，母音を表はす文字は七つ認める。そしてそのすぐ後に，第八として *h* を置いて，それから子音文字を出すといふ順序になつてゐる。そしてこの順序の方が従来の a b c の順序よりも，もつと自然の順序に適つてゐる，とフランクリンはいつてゐる。それは，a b c 順には昔からの慣習といふ以外に順序立てて一定の規準がないからであらう。

母音字と h を子音字の前に置いたのは，フランクリンによると母音と *h* は

「舌や歯や唇の助けをまつたく借りないか，ほとんど借りないで，ただ咽喉から出る息によつて作られる」

音であるためによる。つまり，自然に口から出る音を前に出す，といふ意味で母音をまづ挙げたわけである。母音のすぐ後にhを出したのも，同じ理由である。フランクリンはこの二つをいつしよにして，「単純音」，(simple sound) と呼んでゐる。

そこで，この表音的文字が，どういふ音を表はしてゐるのか，といふ音価の確定が問題になつてくる。その手順は長くなるからここでは便宜省いて，いまは結果だけ述べると，恐らくつぎのやうにならう。

(1) *o* は old が実例としてあがつてをり，

"The first vowel naturally, and deepest sound; requires only to open the mouth, and breathe through it."

といふ説明がついてゐるから，口を開けた音であるが，つぎの (2) 音ほど開いてゐない音，といふわけで，いまの発音符号で書くと，長めの [oˑ] といふ音になりさうである。その他の語例を見ると，so, floating, grows, shows などがある。なほ or もこの語例の中にあがつてゐることは注意してよい。

(2) は *ɑ* といふ新字を工夫して，その例としてはまづ John, folly, awl, ball をあげてをり，さらに

"The next requiring the mouth opened a little more, or hollower".

とあるから，これは (1) の [oˑ] よりも広めの音といふわけで，[ɔ] の音に当ることにならう。ほかの例を調べると，orders [ɔrdəs], perform [pərfɔrm], storm [stɔrm], torrents [fɔrənts], border [bɔrdər] などがある。

(3) の *a* の例としては，まづ man, can などがあがつてをり，ただ

"The next, a little more."

と説明してある。つまり (2) の [ɔ] の次に来る音で，それよりも開きの大きい音であるから，語例から推して，[a] としてよからう。さらに，[a] の

上に位置を占める [æ:] といふ音かどうか、といふことも考へられるから、いまはその音域を大きく考へて、大開き前母音としておく。なほ他の語例を見ると、land, as, than は man, can と同じわけであらうが、command, calm も含まれてゐる。これは今日イギリス英語なら普通 [ɑ:] と発音されるものである。

(4) は *e* といふ文字で、これは men, lend, name, lane などの語例があがつてをり、

"The next requires the tongue to be a little more elevated."

と説明して、(3) の *ɑ* よりも、舌が上つて、口の開きが狭くなつてゐる点を指摘してゐるから、いまの [e] と同じであらう。その他 when, tempests, directs などがあがつてゐる。これらはいづれも短母音であるが、name や lane は [ne:m], [le:n] で、[e] の長母音であらう。これに類する例としては、angel, shakes, late, pale, stains, rains などがほかに出てくる。

(5) は *i* で、語例は did, sin のほか、deed, seen の長母音も入つてゐて、説明としては、

"The next still more."

とあるから、音価は [i] として、その長母音も含めておく。ほかの語例を見ると、with, he, in, it, gu*i*lty, m*i*rrow, l*i*mpid のやうに、強勢のある [i] のほか、d*i*vine, r*e*flect, ris*i*ng, quilt*y* のやうに、強勢のない場合も含まれてゐる。

(6) は *u* で、語例としては tool, fool, rule があがつてゐて、

"The next requires the lips to be gathered up, leaving a small opening."

と説明があるから、[u] の音であらう。その他、furious, pure [piur] のほか、foul, flower も含まれてゐるから、今日の [au] が 18 世紀の中頃アメリカ英語では、まだ [u:] であつたらしい一つの証拠とならう。

(7) は *ŭ* といふ新字を工夫してゐるが，その音は umbrage, unto などに出てくる um や un 音であるが，er の場合にも含まれる，としてゐる。

"The next a very short vowel, the sound of which we should express in our present letters thus, *uh*; a short, and not very strong *aspiration*."

として説明してゐる。この音は，今までの例から推定すると [ʌ] か [ə] の音であるが，説明にある uh といふ音や，強くない音であるといふことから考へてみて，[ə] の方がよいかも知れない。その他実際の改良文字を使つた例を見ると，some, such, runs, rushing のやうに，強勢のある [ʌ] 音らしいものがある。それから，b*y*, div*i*ne, r*i*sing, sh*i*nes 等々のやうにいまの [ai] といふ二重母音の前の音も入つてゐる。また works, wh*ir*lwind のやうに〔ə:〕に当る音も含まれてゐる。また furi*ou*s〔fiuriəs〕, orders, mirror のやうに，強勢のない，今の〔ə〕に当る音も含まれてゐる。

以上の説明によつて，フランクリンは，長母音とか重母音は別として，単音の母音を七つ認めたことになる。そのうち (1), (3), (4), (5), (6) はそれぞれ *o, a, e, i, u* の文字で表はすが，他の二つ (2) と (7)は，特別に工夫した新字を使つてゐる。(2) の文字 *α* は，今の音声符号では，〔ɔ〕に当るやうであるが，この新字の字形は，恐らく a に近づいた o を，シンボライズして造つたか，それともギリシヤ文字のオーメガの小文字 (ω) にヒントを得て造つたものかも知れない。つぎに (7) の *ŭ* といふ文字は，今の〔ə〕に当るとしてよいが，この字形は，uh の u に h の要素を組み合せて造つたものかも知れない。これについては，また後で説く。

III

つぎに，母音の並べ方といふことをこの表から考へると，息の出る方向と

いふ点を基にして，口の奥から始まつて前の方に進むといふことを考へてゐることがわかる。この息の方向によるといふことも，フランクリンのいふ，自然の順序に従つたわけであらう。それで今の音声学で普通説く，前から奥へ進むといふ方向とは逆になつてゐる。

七母音の第一に狭い〔o〕が出てくるが，これも，口をあけて息(声)を出せば，自然に出る音といふわけで，最初にあげたものと思はれる。そしてフランクリンは，この音は最も太い音だとしてゐる。つぎの(2)の広い〔ɔ〕と，(3)の〔a〕は，(1)の狭い〔o〕よりも，順次もう少し口を開いて発音する。つまりそれだけ努力がいるから，(1)の〔o〕ほど自然の音でない。したがつて，フランクリンはこれを(1)の〔o〕の次に置いたわけである。

以上狭い〔o〕と，広い〔ɔ〕，それに〔a〕といふ三つの音では，舌や唇のことは特に触れてゐないから，この三つの母音を出すためには，舌や唇は積極的な役をしない，とフランクリンは考へたものと思はれる。これに対して，次の(4)〔e〕と，(5)〔i〕とでは，発音するのに舌を上げることが特徴だとしてゐる。また(6)の〔u〕では，唇をすぼめるといふことを特に取り立ててゐる。

そこで一つ順序が問題となる。(4)〔e〕と，(5)〔i〕の後に，(6)〔u〕が来てゐるが，これは普通の順序から推して考へると，〔u〕は閉ぢ奥母音だから(1)の狭い前母音〔o〕の前に来る筈である。しかしフランクリンは，息の進む道によつて，順序立てを考へたらしいから，息が口から外へ出る時に，〔u〕音は唇によつて調音される，と考へて〔e〕や〔i〕の後に置いたものと思はれる。今の音声符号表でも，〔u〕音には舌の奥があがることと，唇を丸めることと，二つの調音の場所を示すことになつてゐるが，フランクリンは舌よりも唇の方を重く考へたものと思はれる。

(7)の〃〔ə〕は，従来の文字で表はすとすれば，'uh' の母音に当るとしてゐる。これはいま曖昧音といつてゐる，中母音〔ə〕と同じく強勢のある中

母音の〔v〕(cut の〔v〕)に当る。この母音の説明にはフランクリンも困つたと見えて,「短くて,強くない息の音」といふ意味で, aspiration と形容してゐる。したがつて,これは,今日の音声学で呼ぶ帯気音といふ意味での aspiration とはちよつと意味が違ふ。ただフランクリンは耳に聞えた感じも含めて,弱い息の音と説明したもの,と思はれる。そしてはつきりわかつてゐる前の六つの母音の後に,この中母音を置いたものと思はれる。

なほこの中母音の後に,やはり同じ息の音 (aspiration) といふ意味で,子音の〔h〕を出してゐる。これは (6) よりももつと強い息の音だとフランクリンは説明して,'huh' と呼んでゐる。それでこれと比べてみると,中母音の方も,'huh' の語頭の〔h〕がない音といふわけで,'uh' と級り,この (6) を (7) h と対にしたものと思はれる。そのためこの中母音の字形も u に h の足をつけて造つたものと考へられる。

IV

そこで当時 18 世紀の中頃に,母音は六つであつたかどうか,といふことが問題になる。なほ長母音と重母音とは,しばらく別に取扱ふことにして考へてよからう。まづ〔ア〕の音としてフランクリンが表はしたのは,中母音の〔ə〕,〔ʌ〕を除けば,man や cap の a,すなはち〔a〕あるひは〔æ〕を表はす文字一つしかない。つまり calm や pastの a 音 (今なら〔ɑ:〕との書き分けがしてゐない。それから今日の〔ai〕の〔a〕はby, divine の語例のやうに中母音を使つて〔əi〕としてゐる。また, cut の〔ʌ〕と fur の〔ə〕との書き分けもない。次にこの点を少し考へてみよう。

フランクリンは短い詩を改良文字で書き直してゐるが(附録写真第一参照)その詩の中で, command を land と韻を踏ましてゐるし,また command の場合に,前の母音を表はすのに, a の文字を重ねて使つてはゐない。手紙

は別として，このaはみんなで実例が16も出てくるが，今のアメリカ英語で，普通〔æ〕と発音する場合が少くとも3回出てくる。(land, Britannia, that) また〔æ〕〔*a*:〕の中間音である〔a〕でよい場合が少くとも三回はある (part, command 等)。残りは前母音なら〔æ〕でもよければ〔a〕でもよいといふ融通性のある場合かと思はれる (part, blast 等)。おそらくフランクリンの頃も，このやうな二，三種の*a*音の区別が存在してゐて，このaの文字を以て〔æ〕も表はし，それから奏母音の〔*a*:〕と，この前母音との中間音ならば，どれでもよかつたのではないかと考へられるのである。結局フランクリンの音韻としては，さういふ意味で統一された，現在の前母音の〔a〕に当る母音を考へたものかと思はれる。

そこで音韻史といふ点から考へてみると，ケヌョンに従へば，16世紀の後半では，capはロンドンで〔k*a*p〕と発音し，makeは〔m*a*:k〕と発音してゐたらしい。(John Samuel Kenyon, *American Pronunciation*, 1924; その他 H. C. Wyld, *A History of Modern Colloguial English*. 1936; C. H. Grandgent, "*Fashion and the Broad A*." 1915 など参照) この〔*a*:〕は，調音位置がだんだんと前に出て，17世紀には遂に〔æ〕となつたが，やはり綴字は相変らず*a*であつた。さらに〔æ〕は，舌の位置が上つて，半閉ぢ母音の〔e:〕と変つて，make〔me:k〕と発音されていつた。なほこの〔e:〕は，スコットランドやアメリカ音として今日残つてゐる通りである。しかしまた，アメリカ大陸への移住民は，恐らく〔æ〕〔æ:〕の音や，〔e:〕の音にならない前の，奥母音の〔*a*〕から，前に出かかつた頃の〔a〕音を，新大陸に持ち込んだものと考へられる。そしてアメリカ大陸においても，この〔a〕音がさらに調音位置が上にあがつて，〔a〕から〔æ〕へ進んでいつたと考へられる。それで17,8世紀には，英米の教養人の発音には〔a〕や〔*a*:〕はなくなつたといはれるのである。ところが18世紀の末になると，イギリス本国では〔æ〕の音のほかに，広い奥母音の〔*a*〕，〔*a*:〕の音が復活し

てきた。例へば，1791 年に出た John Walker の *Critical Pronouncing Dictionary* には，〔*a*〕や〔a:〕の音が現はれてくる。しかし10年前の Thomas Sheridan の発音辞書（*A Complete Dictionary of the English Language.* 1780）には，〔æ〕のみで，〔a:〕はないから，　この〔*a*〕音の復活は 1790 年ごろから 1800 年ぐらゐとされてゐる。

そこでアメリカの場合にはどうかといふと，18 世紀末の発音を調べる資料として．例へば前にあげたノア・ウェブスターの *Disserta i n* (1789年)では，央母音の〔*a*〕はまだ現はれてゐないらしい。押韻を調べると，path や bath は，hath と韻を踏んでゐるから，それは〔pæθ〕，〔bæθ〕であるか，少くとも，〔æ〕と〔a:〕の中間音の〔a〕であつたと考へられる。（なほ aunt, jaunt などは，〔æ:〕と認められてゐる。）さて，ウェブスターの辞書は，1789 年に出たものであるから，それより 21 年前の，フランクリンの「改良綴字の企て」においても，方言的な差違といふ考慮もあるが，まづ央母音の〔a:〕はなかつたものと考へられよう。従つてそこでフランクリンが comnand と land と韻を踏ましてゐるのは，大体からいつて当時の音韻体を正しく記述したものかと思はれる。大体からいつてと断つたのは，例へばただ文字だけの押韻も考へられるからである。それで研究者は注意して取扱へば，フランクリンのこの一文は米音韻史上重要な資料の一つになると考へてよい。なほ附け加へると，ウェブスターより10年後の E. Hale の *A Spelling Book* (Northumpton, Mass.) によつても，bask, draft, guard, half 等々の a 音は，〔æ〕であつたと考へられてゐる。

さて，前の〔*a*:〕音は，その後ボストン辺りからだんだんと聞かれるやうになつて，それからアメリカ全土は広く行はれるやうになつていつたが昔の〔ae:〕乃至〔a:〕も，場所により人によつて今日も残つてゐることは人の知る通りである。

つぎに cut の張りのある中母音〔ʌ〕と，fur の曖昧中母音〔ə〕とが，フ

ランクリンにおいて，同じ改良文字(7)で表記されてゐる問題に，触れることにしよう。今のアメリカ英語でも，張りのあるこの〔ʌ〕音は，イギリス英語と比べてみると，一般的にいつて調音位置が少し前の方に出てゐるから余程曖昧音〔ə〕の位置に近づいてくる。結局いまこの二つの音の主な違ひは中母音のうち，強勢のある，張りのある音が cut の〔ʌ〕であつて，強勢のない緩い音が曖昧音の〔ə〕といふことになる。したがつて発音表記の簡易化といふ立前からすれば，〔ʌ〕といふ符号を止めて，〔ə〕一本で，両方を表はし，一つの音韻が，音的環境に従つて変種音になつて現はれるといふ考へ方もできるわけであらう。（例へば，Robert H. Gerhard, *A Handbook of English Sounds* 昭 24 参照)そんなわけで，おそらくフランクリンの頃も，この二つの音が，一つの音韻として考へられてゐたのかも知れない。その一つの証拠として，この(7)の文字の使用例二十五のうち，some, such のやうに，強勢のある場合が7回あり，また order, mirror の語尾のやうに強勢のない〔ə〕が5回ある。このほか二重母音の〔ai〕の〔a〕に当る例が10回あり，その他は雑である。

なほ発音符号の簡易化といふことをいつたが，反転用母音 ɔ, ɜ は別として現在アメリカ母音は単純母音が 13 位あげられるが，これを簡単化すればやはり七つぐらゐでやつていけるかも知れない。この点フランクリンの七母音説は非常に面白い。つぎにこれを示すため *Gerhardt* の簡略符号を借りると（上掲書参照）

現在の簡略符号	フランクリン
i, i:	(5) *i*
e	(4) *e*
e, ə: (ɔ, ɔ:)	(7) *ɩ*
ae	(3) *a*
a, a:	

o, o:	(1) *o*
	(2) *ɑ*
u, u:	(6) *u*

といふやうになる。母音はこのくらゐで切りあげて子音にうつる。

V

まづ子音文字の表をあげると，つぎの18になる。

(1)	*g*	1.	(9)	*L*	4.
(2)	*k*		(10)	*s*	
(3)	*ñ* =〔ʃ〕	2.	(11)	*z*	
(4)	*y* =〔ŋ〕		(12)	*h* =〔θ〕	5.
(5)	n	3.	(13)	*h* =〔ð〕	
(6)	*r*		(14)	*f*	6.
(7)	*t*		(15)	*v*	
(8)	*d*		(16)	*b*	7.
			(17)	*p*	
			(18)	*m*	8.

フランクリンは彼の説く自然の順序に従つて，母音の場合と同じやうに子音も発音する場所が奥のものを先にあげてゐる。総じて子音の方は，母音のやうに手際よくいつてゐない。子音の発音では，発音する位置のほか，破裂音・摩擦音など発音の仕方も重要な区別になるが，フランクリンはこの説明をすこししかしてゐない。例へばr音は舌先を口の天井からすこし離して，震はして出す，といつてゐる。

つぎに一つづつフランクリンの註釈的説明を加へておく。

(1) *g* の例は give, gather である。説明は，

"The first consonant;being formed by the root of the tongue : this

is the present hard *g*".

したがつて，この音価は〔g〕である。なほフランクリンは，この呼名を gi としてゐる。

(2) *k* の例は keep, kick である。説明は，

"A kindred sound; a little more acute; to be used instead of hard *c*"

とあるから，この音価は〔k〕で，(1)の無声音であることがわかる。彼はこの文字を ki と呼んでゐる。

(3) *ſh* の語例は ship と wish で，これは sh の音を表はさうとしたもの。フランクリンの説明は，

"A new letter wanted in our language; our *sh*, separately taken, not being proper elements of the sound."

とあつて，この新しい文字の名前は ish と呼んでゐる。字形は s と h との合字であらう。

(4) *ŋ* の語例は，separating, among で，これは ng の音を表はすもの。フランクリンの説明は，

"A new letter wanted for the same reason…… These are formed back in the mouth."

として，この新しい文字の名前は ing と呼んでゐる。この字形は n と g との合字で，今日発音符号として使つてゐる，〔ŋ〕の形によく似てゐるのは面白い。

(5) *m* の語例は end で，〔n〕音を表はし，呼名は en とする。フランクリンの説明は，

"Formed more forward in the mouth; the tip of the tongue to the roof of the mouth."

これは在来の文字と同じだから問題はない。

(6) r の語例は art で，r の音を表はし，名前は r と呼んでゐる。フ

ランクリンの説明は,

"The same; the tips of the tongue a little loose or separate from the roof of the mouth, and vibrating."

とあるから，これはいまの摩擦音ではなくて，舌先を顫はして出す，昔の半顫動音が当時のアメリカに広く残つてゐたのではないかと思はれる。これは注意すべき資料である。

(7) *t* の語例は teeth で，〔t〕音を表はし， ti と呼んでゐる。この音の説明は,

"The tip of the tongue more forward: tonching, and then leaving, the roof."

とあるから t の音の説明としては，まづ適当である。

(8) *d* の語例は deed で，〔d〕音を表はし， di と呼んでゐる。フランクリンの説明は,

"The same; touching a little fuller."

といふやうに説明してゐるが，これは問題である。

(9) *l* の語例は eel, teel で，〔l〕音を表はし，呼名は el とした。フランクリンの説明を見ると,

"The same; touching just about the gums of the upper teeth."

としてゐる。

(10) *s* の語例は essence で，〔s〕音を表はし，'es' と呼ぶ。この音の説明は,

"This sound is formed by the breath passing between the moist end of the tongue and the upper teeth."

とあつて，「舌の濡つた端と，上歯の間を通る息によつて作られる」と細かい説明をしてゐるのは面白い。

(11) *z* の語例は wages で，〔z〕音を表はし，'es' と呼ぶ。フランクリン

の説明は,

"The same, a little denser and duller."

としてゐる。

(12) *h* の語例は, think で, 'th' の音, すなはち〔θ〕を表はしてゐる。そして呼名は *eh* (eth) としてゐる。この音の説明は,

"The tongue under, and a little behind, the upper teeth; touching them, but so as to let the breath pass between."

(13) *h* の語例は, thy で, 'dh' すなはち〔δ〕音を表はし, *eh*と呼んでゐる。そしてこれに対する説明は,

"The same; a little fuller."

となつてゐる。

としてゐる。なほこの字形は (12) と同じやうであるがこれを少し違へたものであらう。

(14) *f* の語例は effect で,〔*f*〕音を表はし, ef と呼ぶ。この音の説明は

"Formed by the *lower lip* against the upper teeth."

となつてゐる。

(15) *v* の語例は, ever で,〔v〕音を表はし, 'ev' と呼ぶ。そしてこの音の説明は,

"The same; fuller and duller."

とある。

(16) *b* の語例は, bees で,〔b〕音を表はし, b と呼ぶ。この音の説明は

"The *lips full together*, and *opened* as the air passes out"

としてゐる。

(17) *p* の語例は, peep で,〔p〕音を表はし, 呼名は pi とする。この音の説明は,

"The same; but a thinner sound."

とある。

(18) *m* の語例は，ember で〔m〕音を表はし， em と呼ぶ。この音の説明としては，

"The *closing* of the lips, while the *e* 〔here annexed〕 is sounding."

としてゐる。

以上の各子音について，フランクリンが与へてゐる説明は，これでわかつたやうに，調音位置を主としてこれに調音法を加へ，また時には聴覚的印象も加へてゐる。そして18の子音が，この説明によつて8類に分けられることになる。

1. *g* と *k*.
2. フランクリンの改良文字は一々あげないでいふと，今日の〔ʃ〕と〔ŋ〕.
3. n, *r*, *t*, *d*.
4. *l*, *s*, *z*.
5. 要するに〔θ〕と〔ð〕.
6. *f*, *v*.
7. *b*, *p*.
8. *m*.

なほここで注意することは，この子音の順序が，今日の音声学で説く子音の立体的な並べ方とはもちろん違ふが，大体からいつて今日とは逆の順序になつてゐるわけである。それは今日の音声学では，口先から始つて咽喉の方へ向つて音を記述するわけであるが，フランクリンは咽喉の方から始つて口先に向つてゐるからである。

また，〔k〕と〔g〕，〔t〕と〔d〕，〔s〕と〔z〕といふやうにフランクリンは有声音と無声音の対立も考へてゐた。しかし声帯の振動による差といふやうな，生理学的理由は知らなかつたらしく，有声音の方が「一層にぶい音」

(duller) だと聴覚的印象をもつて説明してゐること，前に例をあげた通りである。しかしここに一つ問題が出て来る。それはフランクリンは，〔s〕と〔z〕の対立は認めたし，また sh の音を ish と呼んで取りあげたが，この〔ʃ〕音に対立する有声音，すなはち〔ʒ〕の方は新しい文字を工夫してゐないことである。しかし〔ʒ〕の音の例としては，フランス語の jamais を出してゐるから，彼は音そのものに気がつかなかつたわけではない。そこでこの〔ʒ〕音であるが，例へば vision は〔vizion〕>〔vizjon〕>〔viʒən〕と発達したやうで，17世紀には，zi＋母音＝z＋母音といふことになつてゐたから，フランクリンの頃（18世紀後半）には，〔ʒ〕があつたことは確実である。例へば前にあげたウォーカーの辞引にはその表記が工夫されてある。この点フランクリンの改良文字は，ちよつと穴があつて不統一，不完全の嫌があるが，これについては後でまた説くことにしよう。

ついでにここで一言附加へると，この sh の音を k, g, ng と同じ類にして，口の奥で発音されるとしたのは問題である。この〔ʃ〕音の変種音として今でも英語に舌先を上歯の後の口蓋につけないで，舌先をちよつとさげて発音する sh の音がある。もしフランクリンがこの音を考へてゐたなら，これはある意味で口蓋化に近いわけであり，k, g の類に入る可能性が少しはあることにならう。

つぎに r の音は前に述べたやうに，舌先を口の天井に向けて顫はせて発音すると説いてゐるから，いまのやうな摩擦音でなく，昔の古い半顫動音が当時アメリカに残つてゐたものと思はれる。

VI

その他音声学の上から見ていろいろな問題が出るが省略して，フランクリンの改良文字と伝統的文字との関係に触れよう。

まづフランクリンの改良文字では，子音文字の表を見てすぐ気がつくことは，c の文字がないことである。c の文字は普通〔k〕音と〔s〕音を表はすわけであるが，この二つの音はそれぞれ k と s といふ文字を使つて表はすから，c といふ文字が不用になるわけである。

(2) 同じやうな理由で，q の文字も省かれる。q の字は〔k〕音を表はすが，これには k の文字が当てられるからである。

(3) また x の文字は，普通〔ks〕を表はすわけであるが，この複合音は k と s との文字の組合せによつて表はすから x といふ文字は不要になる。

(4) u といふ文字は，〔u〕とも発音するから，この音は余程〔w〕といふ子音に近くなる。それでフランクリンは，w といふ文字を捨てて，〔w〕音を oo で表はした。

(5) また y といふ文字も使つてゐない。普通 y は〔i〕と〔ai〕を表はすが，〔i〕の方は i といふ文字で表はし，〔ai〕の方は前にあげた中母音のつぎに i を添へて〔əi〕とするから，それで y といふ文字はいらなくなる。

このやうにフランクリンは，w と y の字を省いたが，恐らくこれはフランス語の綴り字法を真似たものと思はれる。人の知る如くフランクリンは，独立戦争の時フランスに使して，米仏條約を成功させるといふ功績を残してゐるが，もちろんその前から本国あるいは英国でフランス語に接したことと思はれる。それは前に触れたやうに，jamais といふ例をあげたことでもわかる。そんなわけで，フランス語では ou といふ文字も，i といふ文字も母音を表はすのにも使へば子音を表はすのにも使ふ。この流儀に従つて，子音を表はすために，特に w の文字や y の文字を使はなかつたと考へられる。それからもう一つの理由は，この二つの文字（w，y）を加へると，伝統的の abc 26 文字より数が多くなつてしまふといふことも，あるいはフランクリンが考へてゐたかも知れない。

(6) それからつぎに j の文字だが，これもフランクリンは省いた。それで

January や gentle のやうに，〔dʒ〕といふ破擦音を表はすためには，d の文字と，前にあげた sh の文字（ʃ）とを組合はせた〔dʃ〕といふ合字を使つた。

このことは，g の文字とも関係してくる。これは，いはゆる固い〔g〕音と，軟かい〔dʒ〕音の両方を表はすが，〔dʒ〕の方に，〔d+ʃ〕で表はせるから，g の文字に関する限り一字一音といふことになるわけである。

(7) それから，〔dʒ〕の無声音の場合（〔tʃ〕）を考へると，この破擦音はフランクリンもやはり t に sh の改良文字を組合はせて表はしてゐる。例へば cherry は〔tʃeri〕となる。

(8) ここで再び前にあげた jamais, pleasure の〔ʒ〕の音を考へると，フランクリンはこれを z+sh 文字で表はした(zʃ)。例へば，フランクリンのあのげた例は jarnais〔zʃame〕となつてゐる。従つて，pleasure は〔plezʃər〕となるわけである。

以上述べてきたやうに，フランクリンは，c, j, q, w, x, y の六文字を省いて，その代り，母音文字としては〔ɔ〕と〔ə〕に当る二文字を加へ，子音文字としては，〔ʃ〕，〔ŋ〕，〔θ〕，〔ð〕の四つを加へたから，結局増減はなく文字の数はやはり二十六文字となるわけである。

Ⅶ

以上の 26 文字を使へば，「どの音でもはつきり区別がつくやうに書き表はせる」と，フランクリンはいつてゐる。この点多少問題が出るが，とにかく一先づこれでも結構やつてゆけることは事実である。それはとにかくとして，フランクリンが音声学以前にこれだけの鋭い考察をしたことは特筆に値ひする。またこれは，発音通り一音一字式に綴るといふ点で普通の綴字改良の行き方とは違つてゐるわけである。それでこの点，余計な文字といふかい

はゆる默字はなくなつてしまふ。

(1) 文字用法上の疑点　前にあげた〔ʒ〕の代はりに合字として〔z+ʃ 音字〕を使つたが，これは〔tʃ〕に対する〔t+ʃ音字〕，および〔dʒ〕に対する〔d+ʃ音字〕の表記法とは意味が違つてくる。後の二つの場合は，ともに合字によつて破擦音を表はしてゐるが，〔z+ʃ音字〕では，一つの摩擦音を表はさうとしたのであるから，ここに表記法の不統一といふことが問題になつてくる。つまり，〔z+ʃ音字〕においては，ʃ 音の調音位置で有声化といふことを表はすからである。また，〔t+ʃ音声〕は〔(無声 t)+(無声ʃ)〕の合成した無声破擦音を表はすが，〔d+ʃ音字〕では，(有声d)+(無声ʃ の有声音)〕の合成した有声破擦音を表はすからである。しかしこの点は，改良文字の数を減らして，表記法の簡易化を図るといふ点を考へあはせると一概に不統一を責めるわけにもゆかない。

(2) つぎに興味のある問題を考へてみるが，まづ英語史の問題として重要な資料と思はれる点をあげよう。

(a) l の挿入。calm が〔kalm〕なつてゐるほか could も would も l が入つてゐる。

(b) more も mode も，同じ〔o〕で，〔ɔ〕と〔o〕の書き分けがない。しかし，fore と for とは，母音を書き分けてまる。

(c) either は〔əiðər〕で，〔i:ðər〕でない。

(d) the はいつも〔ði〕で，〔ðə〕とはならぬ。

(3) アメリカ方言とも関聯した問題を拾つてみると，

(a) has は〔hez〕，have も〔hev〕となつてゐる。

(b) get は〔git〕となる。

なほ friend も〔frind〕となつてゐるが，これも米語史及び方言と関聯した問題とならう。

(c) new は〔nu〕となつてゐるが，今日のニューヨーク辺りの発音と比べ

ると興味深い。

(4) なほ，whole は〔hol〕でも〔houl〕でもなく，〔huol〕となつてゐる。この〔u〕は〔w〕を表はして，結局 OE の hw- のやうなアメリカ音を表はすのかどうか疑問である。

註記 (1) 附録写真第一図を普通の文字で書き直すと次のやうになる。

So when some Angel, bv divine command,
With rising tempests shakes a guiltv land;
(Such as of late o'er pale Britannia past;)
Calm and serene he drives the furious blast;
And pleased th' Almighty's orders to perform,
Rides in the whirlwind and directs the storm.

So the pure limpid stream, when foul with stains
Works itself clear; and as it runs refines;
Till by degrees, the floating mirror shines,
Reflects each flower that on its border grows,
And a new heaven in its fair Bosom show.

註記 (2) これを普通の文字で書き直すと次のやうになる。

Answer to Miss S

Dear Madam,

The objection you make to rectifying our alphabet, "That it will be attended with inconveniences and difficulties," is a natural one; for it always occurs when any reformation is proposed; whether in riligion, government, laws, and even down as low as roads and wheel carriages. The true question then, is not whether there will be no difficulties or inconveniences, but whether the difficulties may not be surmounted; and whether the conveniences will not, on the whole, be greater than the inconveniences. In this case, the difficulties are only in the beginning of the practice: when they are once overcome, advantages are lasting,—— To either your or me, who spell well in the present mode, I imagine the difficulty of changing that mode for the new, is not so great, but that we might perfectly get

over it in a week's writing. —— As so those who do not spell well, if the two difficulties are compared, viz. That of teaching them true spelling in the present mode, and that of teaching them the new alphabet and the new spelling according to it, I am (以上でP.362 までの分)

註記 (3) 附録写真第二図の内容はこの論文の本文の中でいろいろ説明したからここでは註訳を補はない。

two of our vowels joined; [viz.] *ɥ* as sounded in "unto," and *i* in its true sound. Any one will be sensible of this, who sounds those two vowels *ɥ i* quick after each other; the sound begins *ɥ* and ends *ii*. The true sound of the *i* is that we now give to *e* in the words "deed, keep—*."

第一図

EXAMPLES [*of writing in this Character.*]

So huen sɥm Endfiel, bɥi diviɥin kamand,
Uih rɥiziɥ tempests fieeks e gilti Land;
(Sɥtfi az av leet or peel Britania past,)
Kalm and siriin hi drɥivs hi fiuriɥs blast;
And, pliiz'd h' almɥitis ardɥrs tu pɥrfarm,
Rɥids in hi Hunɥrluind and dɥirekts hi Starm.

So hi piur limpid striim, huen faul uih steens
av rɥfiiɥ Tarents and disendiɥ Reens,
Uɥrks itself kliir; and az it rɥns rifiɥins;
Til bɥi digriis, he floti ɥ miɥr fiɥins,
Riflekts iitfi flaur hat an its bardɥr groz,
And e nu hev'n in its feer Bɥzɥm fioz.

* The copy, from which this is printed, ends in the same abrupt way with the above, followed by a considerable blank space; so that more perhaps was intended to be added by our author. B. V.

Letters	Sounded respectively, as in the Words in the Column below.
o	Old.
**a*	John, folly; awl, ball.
a	Man, can.
e	Men, lend, name, lane.
i	Did, sin, deed, seen.
u	Tool, fool, rule.
**y*	Um, un; as in umbrage, unto, &c. and as in *er*.
h	Hunter, happy, high.
g	Give, gather,
k	Keep, kick.
**ſ*	(sh) Ship, wish.
**ꝯ*	(ng) ing, repeating, among,
n	End.
r	Art.
t	Teeth.
d	Deed.
l	ell, tell.
s	Essence.
z	(ez) Wages.
**ꝥ*	(th) Think.
**ꝺ*	(dh) Thy.
f	Effect.
v	Ever.
b	Beer.
p	Peep.
m	Ember.

Manner of pronouncing the Sounds.

Names of Letters expressed in the reformed Sounds and Characters.	
o	The first Vowel, naturally, and deepest sound; requires only to open the mouth, and breathe through it.
ca	The next requiring the mouth opened a little more, or hollower.
a	The next, a little more.
e	The next requires the *tongue* to be a little more elevated.
i	The next still more.
u	The next requires the *lips* to be gathered up, leaving a small opening.
y	The next a very short vowel, the sound of which we should express in the present letters thus, *uh*; a short, and not very strong *aspiration*.
huh	A stronger or more forcible aspiration.
gi	The first Consonant; being formed by the *root of the tongue*; this is the present hard g.
ki	A kindred sound; a little more acute; to be used instead of the hard c.
ish	A new letter wanted in our language; our *sh*, separately taken, not being proper elements of the sound.
ing	A new letter wanted for the same reason:—These are formed *back in the mouth*.
en	Formed *more forward* in the mouth; the *tip of the tongue* to the *roof* of the mouth.
r	The same; the tip of the tongue a little loose or separate from the roof of the mouth, and vibrating.
ti	The tip of the tongue more forward; touching, and then leaving, the roof.
di	The same; touching a little fuller.
el	The same; touching just about the *gums* of the *upper teeth*.
es	This sound is formed by the breath passing *between* the moist end of the *tongue* and the *upper teeth*.
ez	The same; a little denser and duller.
eh	The tongue under, and a little *behind*, the upper teeth; touching them, but so as to let the breath pass between.
eh	The same; a little fuller.
ef	Formed by the *lower lip* against the upper teeth.
ev	The same; fuller and duller.
ɜ	The *lips full together*, and opened as the air passes out.
pi	The same; but a thinner sound.
em	The closing of the lips, while the e [here omitted] is sounding.